

1919年前後における日中「アジア主義」の変容と分極の諸相

著者	尹 虎
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	12
ページ	3-16
発行年	2015-01-30
URL	http://doi.org/10.15002/00022478

1919 年前後における 日中「アジア主義」の変容と分極の諸相

尹 虎

はじめに

ヨーロッパの伝統的なウェストファリア国家体制は第一次世界大戦によって破綻する。ソビエト・ロシアのレーニンと、アメリカのウィルソンを旗手とする「新外交」の出現、国際連盟結成につながる「新国際秩序構想」の登場は、新しい「改造の時代」の到来を示唆するものであった。1919 年前後のこのような国際情勢の変化は、東アジアに大きな影響を及ぼした。中国新民主主義革命の始まりとみなされる五四運動も、工人階級が初めて独自の政治勢力として指導した六三運動も、1919 年に勃発する。また、1919 年は新文化運動(1917 - 1923)の高潮期でもあった。このように、中国近代史の中でもっとも重要な意味をもっている三つの運動とも 1919 年に進行していたのである。一方、朝鮮では三一運動が発生し、日本では 1919 年の米騒動をきっかけに労働運動、選挙権拡張運動が盛んに行なわれただけでなく、民本主義のイデオログとしての地位を確立した吉野作造を中心として「日本の改造」が語られていた。そうした状況の中でアジア主義も新たな展開を示し、分極化して行くのである。

時代を画するような「1919 年前後」の国際情勢の激動は、日中両国の思想家達に対応を迫ると同時に、新しい思想上の課題を与えるようになる。本論は日中両国の 5 人の思想家¹を取り上げ、1919 年前後において彼らのアジア主

¹ 本論は日中関係史の中で、アジア主義者として広く認識され、また、異なる思想領域においても典型的な人物だと認められている 5 人(孫文、李大釗、内田良平、北一輝、宮崎滔天)の思想家を研究対象として取り上げることとする。

義²の認識にどのような変化が現れたかに注目しながら、1919 年前後におけるアジア主義の認識の実態を解明することを試みる。そして、日本におけるアジア主義にとって、中国の思想家達（孫文、李大釗）が提言した「日中両国の平等な連帯に基づくアジア連邦の建設と新しいアジア主義の実現」を受け入れることができるものであったかについても検討を行う³。

1. 民主革命の先行者・孫文のアジア主義認識の変化

孫文のアジア主義は、帝国列強とりわけ欧米列強の侵略による中国の半植民地化という現実のなかで、アジア諸民族、諸国家の団結によって列強に対抗し、アジアの解放を求める思想であった。そして、孫文のアジア主義を構成する要素としては、主に「黄白人種闘争観」と「日中提携論」が存在していた。歴史上の新しい時代の到来を示唆した 1919 年は、孫文のアジア主義においても分岐点ともいえる年であった。

1919 年以後、孫文は三民主義の理念によって、アジア主義を徹底的に改造していく⁴。そして、そのアジア主義改造の過程において、孫文の「日中提携論」に変化が現われ始めた。孫文は日本に対して期待する態度を基本的に改め、日本の帝国主義を公然と批判し始めたのである。1919 年 6 月 13 日、「朝日新聞」の上海特派員太田宇之助の質問に答えて、孫文は次のように述べている。「山東問題に対するシナ国民の期待に反せる丈排日感情旺盛にして恐らく百年を経るも忘れざるべし。（中略）日本は事実を尽くさずして却って過去四年間之を裏切れり。両国の親善実現の希望は予の希望する条件を容れなば猶存す。（中略）日本が大なる問題さへシナに許さばほかは自ら解決せん。今は其希望なきを以て両国親善の希望は長くあるなし」。6 月 14 日の「朝日新聞」にも孫文の日本軍閥に対する厳しい批判が載せられている。そして、「連ソ政策」が形

² 本論は藤井省三の「アジア主義はアジア諸民族、諸国家が団結して欧米列強の圧迫、侵略に対抗しようとする思想或いは運動である」という概念をもって「アジア主義」を定義する（藤井省三「アジア主義とは何か」『歴史評論』1996 年 1 月号、23 頁。）

³ 極めて短い時期、すなわち、1919 年前後を研究範囲としたことと、日中両国の視点から当時のアジア主義の変化に注目した点は、本論が新世紀のアジア主義研究に貢献できるところだと思われる。

⁴ 趙軍『大アジア主義と中国』亜紀書房、1997 年、98 頁。

成されつつあった 1923 年 5 月、孫文は、広東軍政府の大本営を訪問した鶴見祐輔と会談した際にも、日本の北京政府援助を徹底的に批判し「西洋流の侵略」であると決めつけ、満州から撤退の要求している⁵。

以上のような孫文の日本に対する態度の転換をもたらした直接の要因として、ロシア 10 月革命、五四運動からの影響のもと、寺内正毅内閣の援段政策、原敬内閣への期待の挫折を挙げることができる。こうして、孫文の従来の「日中提携論」は崩壊し始め、対日批判を強めていくことになる。そして、孫文の基本的戦略が連ソ、容共、労農扶助の三大政策に収斂していく中で、日本に対して、主として民衆勢力に中国革命への真正の理解と同情と支援を呼びかけるにいたったのである⁶。

孫文のアジア主義のもう一つの構成要因である「黄白人種闘争観」も 1919 年前後から変化し始めた。1920 年 1 月 1 日の「大正日日新聞」に掲載された孫文の談話「シナ人の日本観」には「アングロサクソン対非アングロサクソン民族の結合」との対立と衝突について述べられている。談話の中で孫文は「日本と中国が後者の中心勢力となり、これにインド、トルコ、ドイツ、バルカン諸国も加わる」という人種を超える構図を提示していたのである。

1923 年 11 月 6 日に孫文が第二次山本内閣の通信大臣として入閣した犬養毅に宛てた書簡の中で、孫文は「黄白人種闘争観」を完全に否定し、「アングロサクソン対非アングロサクソンの衝突説」も払拭する⁷。孫文はアジアの現状について次のように述べている。「将来の戦争は黄白人種の間の戦争であるとか、欧亜の戦争であるとか言うものが多いけれども、私はそうではなくて、必ずや公理と強権の戦いであると敢えて断言する。強権を排撃しようとする者は、もちろん、アジアの被抑圧人民の間に多いが、ヨーロッパの被抑圧人民の間にも少なくない。その故に、被抑圧人民は連合して、横暴なものを排撃しなければならない」。ここで、孫文が次の世界大戦は黄白の人種の戦争ではなく、被抑圧人民の連合と横暴者との戦争であろうと予想していた点は注目に値するだろう。

⁵ 鶴見祐輔「広東大本営の孫文」（『改造』1923 年 7 月号）。

⁶ 藤井省三『孫文の研究』劉草書房、1983 年、28 頁。

⁷ 孫文『孫中山全集』第八巻、中華書局、1981 年、401 頁。

このように、孫文のアジア主義の主要な構成要素の一つである「黄白人種闘争観」は 1919 年以降変化し始め、1923 年からはそれとまったく異質な、むしろアジアでは日本以外のアジア諸民族を抑圧民族と被抑圧民族とに区分する、いわば「抑圧民族対被抑圧民族闘争観」とも言うべき民族観、ないし、国際観を展開するにいたったのである。

1924 年 11 月 18 日、神戸で行なわれた孫文の「大アジア主義」講演は、晩年の孫文のアジア主義に対する見解のもっとも代表的な例である。孫文がこの講演の中で日本国民にもっとも強く訴えようとしたことは、無条件の「中日提携」でなく、日本に対する不平等条約の廃棄の要求であり、アジア王道文化の本質も有するとともに、過去においてヨーロッパの覇道に苦しんだ経験がある日本に婉曲な表現ながら王道の選択を求めたことであった⁸。「大アジア」講演で孫文は、「黄白人種闘争観」と「日中提携論」を前提とした過去の孫文のアジア主義と根本的に違う、被抑圧民族のための不平等条約廃棄を前提とする独自の「大アジア主義」を日本国民に提起したのである。

2. マルクス主義者・李大釗のアジア主義認識の変化

李大釗は五四運動が生み出した中国のマルクス主義思想家であり、中国共産党の創立者の一人でもあった。新文化運動において李大釗は陳独秀とともに、「南陳北李」（南は陳独秀、北は李大釗）という、新しい文化を創造する二つの中心を形成していた。

李大釗がはじめて、アジア主義に関して自分の見解を示したのは 1917 年 4 月の「大アジア主義」と題する論文の中である⁹。1917 年、李大釗は「西洋文明は略奪の文明である以上、我々が、西洋の侵略に対抗するために、大アジア主義の旗印をあげるのは当然の反応である」と考えていた。また、日本に対して「中国はアジアの重要な構成部分であり、中国の国家改造と、独立、復興は大アジア主義の理想実現に欠かせない第一歩である」と強調しながら、「同洲同族の深い同胞友誼をもって、中国の独立を助け、西洋の侵略に反対し、中

⁸ 陳徳仁、安井三吉『孫文・講演「大アジア主義」資料集』法律文化社、1989 年、97 頁。

⁹ 『李大釗文集（上）』人民出版社、1984 年、449 頁。

国と相互連携して、世界の真那道義と、世界平和のために大アジア主義を実現せよ」と提言した¹⁰。ここで、注目すべきことは、1917 年において、李大釗の大アジア主義は西洋に対抗するためのものであり、日本が中国の国家改造と、独立、復興を助けることを期待するものであったという 2 点である。

第一次世界大戦前後の中国に対する日本帝国主義のあからさまな侵略行為は、李大釗の日本に対する期待を破り、日本が提唱する大アジア主義の本質を認識するようになる。また、ロシア革命の意味と新文化運動に対する洞察は、李大釗のアジア主義理論を徐々に成熟させた。その後から李大釗は、中国、アジア民衆に有益な「真のアジア主義」の根本的な道をさぐりはじめ、「新アジア主義」を構想することによって日本の国権主義、アジア主義を批判するようになる。

李大釗は 1919 年の 1 月の論文「大アジア主義と新アジア主義」の中で、大アジア主義の内容とその性格について次のような分析を展開していた。「第一に、大アジア主義とは中国合併主義の隠語であることを心得ていなければならない。中国の運命が列強の勢力の均衡によって左右されていることは言うまでもない。日本が中国を独占しようと思えば、先にこの均勢を取り除かなければならない。思案の末、案出したこの言葉は表面ではただ同文同種のような親善の話ばかりなのに、その裏には実際、独りで中国を併呑しようとする意味が潜められているのである。第二に、大アジア主義とは、大日本主義の別称であることを心得ていなければならない。即ち、日本人はアジア・モンロー主義の話を以って、欧米諸国のアジアにおける勢力の拡張を断わり、アジアにおける諸民族を日本の支持に従わせ、アジアの問題を日本人の手で解決させて、日本がアジアの盟主になって、アジアを日本人の舞台となるようにしようとする主張である」¹¹。彼は、大アジア主義は「中国を併呑する主張の隠語」であり、「大日本主義の変名」であることを見抜いていた。

以上のことから、1917 年に、日本が中国の国家改造と、独立、復興を助けることで大アジア主義の実現することを期待していた李大釗のアジア主義思想は、1919 年前後において、日本への期待が警戒に、批判に変わりつつあっ

¹⁰ 同上、447 頁。

¹¹ 『李大釗文集（下）』人民出版社、1984 年、609 頁

たことがわかる。

一方、李大釗は1919年11月の論文「新アジア主義再論」の中で新しい「アジアの連合論」を提出する¹²。李大釗によれば、「新アジア主義」における「アジアの連合」は、日本が主張する「排外主義」、「閉鎖主義」ではなく、自治的で個性を尊重する民主的組織である。この組織の中には、アジア地域内に定着生活をしている欧米人も参加することを想定していた。そして、「アジアは、我々が世界を改造する始まりの一部であり、アジア人の独占的舞台ではない」と李大釗は主張していた。また、日中両国問題については、日本と中国が、両国の間に存在する抑圧を取り除き、真の両国民の平等な連帯に基づくアジア連合を結成することを提言していたのである。

1919年前後において、李大釗は日本の大アジア主義を批判しながら、真の日中両国民の平等な連帯に基づくアジア連邦と新しいアジア主義の実現を渴望していた。その当時の歴史もその後の歴史も、みな彼の分析が正しいことを明確に裏付けていたので、「大アジア主義＝中国併呑主義」、「大アジア主義＝大日本主義」という見方は、60年経った現在でも、中国人のアジア主義に対するもっとも一般的な認識になったのである。

3. 国権主義者・内田良平のアジア主義認識の変化

1919年五四運動のデモは急速に全国の各層に伝播した。6月になると、中国全土に罷市、罷工、罷課を含む反日、反政府運動、さらに反帝、反軍閥運動が激しく大衆運動として展開するようになった。内田良平は五四運動の原因を日本側の対中国政策上の不注意、努力不足及び中国側の無責任に求めた¹³。彼は日本の対中国政策の正当性如何をまったく不問に付して、排日運動に集結した中国のナショナリズムに幾分かでも正当な評価をくだすことを避けた。

内田は中国の排日運動と敵対するなかで、日本のブルジョアジー（全国商業会議所連合会、日華実業協会、東京実業組合連合会などの団体）と直接手を

¹² 王朝柱『李大釗選集』中国青年出版社、1989年、227頁。

¹³ 王興君『日本の国権主義』内蒙古文献出版社、1982年、45頁。

結ぶようになる⁽²⁾。孫文など革命派を援助し辛亥革命に向けて働いたとき、内田は一部のブルジョアジーと結託していたが、それはあくまで「一部」にすぎなかった。しかし、1919 年時点で、内田はブルジョアジー全体と協同していたのである。これはまさに、1919 年前後における、内田のアジア主義認識における最大な変化とも言えよう。

1919 年の中国革命運動における中国民族のナショナリズムと日本の帝国主義とは、根本的に対立するものであった。内田は、その根本的対立を残したまま、政府の策略に問題をすりかえて解決しようとした。当時、彼が参加していた国民外交同盟会は、1919 年に新四国借款団結成の動きに対し、政府に意見書を申し入れた。この中で内田は、満蒙、山東、ひいては、福建を日本の特殊権益地域として確保し、工業原料と食料をとくに日本のために確保し、また軍事的間接介入の余地を残しておこうとした¹⁴。

では、1919 年、内田はどのような理由によってこうした政策を主張したのか。「国権主義者、内田」と規定してしまえばそれまでだが、ここにはやはり当面の問題の一つのきっかけが存在しているように思われる。中国認識のある種の型を示すものとしてその理由を検討しよう。

内田によれば、「世界の国民中、其の性情の劣悪なる、支那国民の如きは稀なり。彼等は自家中心としてその政権欲逞うするの凶漢に非ずんば、自家の私利私福のためには如何なる如何なる羞恥をも忍受するを辞せざるの險民なり。彼等に敵愾自強の志気なし。主義といひ、主張といひ、人道といひ、各文といひ、彼等の前に於て固より何等の意義をなすものに非ず」¹⁵。なるほど、辛亥革命の動きは、一面から見れば、確かに「支那国民の覚醒」が見られなくはない。しかし、内田によればそもそも「支那は畸形国」であって、「政治社会と普通社会と全然分離して別社会を形成」したのである。注目すべきところは、1919 年前後における内田の中国認識には、辛亥革命の前、孫文を援助する時に現れた中国革命に対する期待、革命派に対する信頼などの感情は変化し、すでにその姿を消していた点である。

1919 年前後において、内田は中国認識の上で、中国における歴史的な動き

¹⁴ 黒龍倶楽部編『国士内田良平傳』原書房、1972 年、33 頁。

¹⁵ 内田良平『支那観 国難来』黒竜会、1937 年、20 頁。

の現実、実体を把握することを避け、欧米の「中国蚕食」という国際状況に対する理解と、西欧近代のアジア進出という一般的な潮流そのものの中に身を任せ、「勢力均衡」を自らの視点とすることによって蚕食されつつある中国を「畸形国」、「特殊の相手」として捉えたのである。このような、中国認識が内田自身の思考の中心になっていたとすれば、ここから出てくるのは、もちろんもっとも露骨な中国侵略主義であった。

1919 年前後における内田の日中関係認識には「アジア主義」的な要素を探しにくくなっていた。内田はすでにブルジョア全体と立場を一緒にしただけでなく、内田が主張する対中政策も西洋列国の侵略政策と同じようになっていた。いつから変化が現れたかは解明できないが、「1919 年前後」という時点において、内田の「対中認識」、「国際秩序論」、「アジア認識」は、すでに孫文を援助する時と違うものに変化していたのである。

以上の分析から、中国の思想家の「日中両国の平等な連帯に基づくアジア連邦の建設と新しいアジア主義の実現」という提案は内田のアジア主義理論において絶対受け入れないものであったことが明らかになった。しかし、内田のような中国問題と国際状況に関する把握は決して、内田にのみ限られた捉え方ではなかっただろう。むしろ、それは、日露戦争以後のほとんどすべての中国認識の中で、多かれ少なかれ、浸潤しつつあった一つの流れだったのである。

4. 超国家主義者・北一輝のアジア主義認識の変化

1919 年、五四運動の際、北一輝は上海に滞在しながら、『国家改造原理大綱』と題する本を執筆していた。周知のように、1932 年に『日本改造法案』改題して公刊された同書は、戦前の日本少壮軍人に「革命の聖典」として奉じられてきたものである。中国革命に従事するために中国に渡った北が、中国に滞在しながら日本の革命を計画した事実は、北の思想における大きな変化を表していたのであった。

『国体論及び純正社会主義』で出発した彼は、その生涯をほぼ十年間中国革命の中に没入させることになる。そして、その間の経験は 1916 年、『支那革命外史』の中に結実する。北は『辛亥革命外史』において、辛亥革命の理論的

解釈と同時に、もうひとつの重要な主題として、日本の「革命的対外策」の樹立を提唱した。それは、革命中国が「国家的覚醒」のうえに、軍国主義をとり、自らの国家的権利を外国対して要求することから出発していた。中国はこの方策の下に、何よりもまず「露支戦争」を必要とする。そして、日本は日英同盟を廃棄して英国を「南支那」から駆逐し、他方ではロシアを退け満州に進出する。「支那は先づ存立するために、日本は小日本から大日本になるために」、「露支戦争」は戦わなければならない。こうしてこれを基盤としてこそ「日支同盟」が成立することができるのであった¹⁶。

しかしながら、このような主張の中には、致命的な欠点が存在していた。その欠点は「中国の国家的覚醒」と「日支同盟」に存在する矛盾において現れた。北の思想的根本が国家民族主義、即ち国家の覚醒にあるとするならば、「日支同盟」は、保証され難くなる。むしろ、そこから、究極的には国家利益の確保のために「日支両国」の衝突もなりうるのである。まして、北の祖国日本が、日露戦争以降積極的に中国を侵蝕しているとしたら、その結果は、北が期待した「露支戦争」ではなく、排日運動と「日支」の民族的衝突が起きる可能性も非常に高くなる¹⁷。

1919 年、北は「涙痕血史を共にせる刎頸の同志」が奮起し日本に反対する光景を見ながら、日本人として中国革命に参加する限界を痛感した。北は排日運動の推移の中で、その矛盾を、たとえようもない深さをもって認識せざるをえなかった。また、日本の国内改造をしない限りでは本当の日中友好は不可能であるという道理を悟ったのである。その結果、彼は 13 年間従事してきた中国革命を捨て、日本革命への転向を模索するようになる。いわば北はその矛盾の突破口を、ついに「革命帝国主義」の中に求めることになる。こうした彼の構想は、大帝国の建設の野望において、帝国主義という敵の武器を身に付けた上での、欧米中心の世界秩序に対する正面からの挑戦であった¹⁸。

アジア主義のなかで普遍的に見られる欧米列強からアジアを守る防衛的な姿勢に対して、北は逆に、全世界の覇権国たらんという攻撃的な姿勢を示し

¹⁶ 宮森盛太郎『北一輝研究』有斐閣、1975 年、177 頁。

¹⁷ 同上、187 頁。

¹⁸ 岡本幸治『北一輝・転換期の思想構造』ミネルヴァ書房、1996 年、76 頁。

ていたのである。北によれば、日本は、欧州にとって破滅的な5年を充実の5年とし、この機会を利用して我々は、天皇を奉じて速やかに改革を進むべしというのである（『国家改造案原理大綱』緒言）。そして、天皇制社会主義的とも言うべき国内改造をまず取り上げたうえで、アジア連盟の義旗をあげ、印度、中国7億の同胞を先導し、あるべき世界連邦のヘゲモニーをとれと北は主張した。北の理論における日中関係は、天皇を奉じる、天皇制社会主義に基づくものであった¹⁹。

北の国際秩序観における日中関係は「運命的共同体」ではあるが、詳しく運命的共同体内部の関係を分析すると、まさに天皇を奉じることを前提とする指導と被指導の関係であることがわかる。それは孫文と李大釗が望んでいた日中関係とは別物であった。帰国後、北の中国政治の変革に対する関心が薄くなり、中国に関連する著作は1921年に6年前の旧作『支那革命及び革命支那』を『支那革命外史』と改題して公刊した以外、ほぼ11年余の間隔をおいて著した1932年刊の「対外国策に関する建白書」だけである。中国から目を逸らした北は、当然、五四運動以降の中国民衆の動きを捉えることができなかっただけでなく、帝国主義的侵略に対する中国の抵抗ナショナリズムの根源を見通すこともできなくなった。

5. 自由民権論者・宮崎滔天のアジア主義認識の変化

宮崎滔天の思想の中心をなすものは支那革命主義である。中国をブルジョア民主主義革命を行うスタートライン及び中心地として、アジア諸国と世界におけるブルジョア民主制度の確立を終着点にした理論は支那革命主義の核心理念である。滔天によれば、日本は国として小さいし、力も弱いので、革命の先行国になるべきではなく、まず中国で革命を成功させてからまた日本と朝鮮の革命を促進したほうがいい。そして、日本、朝鮮、中国の三国が真の自由民権主義の国家になれば、民主、平等の原則のもとで同盟関係を結んで、ほかの弱小国家を救って、「宇宙に新紀元を建立する」ものであった²⁰。

¹⁹ 同上、83頁。

²⁰ 宮崎滔天「支那革命物語」『宮崎滔天全集』第1巻平凡社、1976年、296頁。

だが、中国革命の現実には滔天の期待を裏切った。辛亥革命を始めとする孫文の国民革命は挫折し、中国は依然として列強に運命を左右されていたのである。中国革命を日本に波及できる可能性は低くなりつつあった。滔天はその現実に関心を痛んでいた。そして、1919 年前後において、滔天のアジア主義は「支那革命主義」から「日中の改造運動」へ変化したのである。

まず、張継らの「日本国民に告げる書簡」に対する滔天の回答から滔天の「日中改造論」を見てみよう。1919 年 5 月、張継らは上海駐在の日本の記者を招き、「日本国民に告げる書簡」を発表した。この公開書簡は朝鮮と台湾を植民地として「同人種を奴視」し、更に第一次大戦中に二十一カ条を中国に強制した日本の外交政策を痛烈に批判したものである²¹。滔天は、この公開書簡に対して、「要は我国の伝統的外交を一変せよと言ふにあるが如し。言や率直也、而してまた御尤も也」とひとまず賛意を表した上で、中国側にも問題があるという。日本の「軍閥外交」を招き寄せている「腐敗物」の存在を指摘するのである。それは「支那の軍閥官僚」にほかならない。中国国民たるもの、まずこの「腐敗物」を除去すべく努力せよというのが滔天の回答であった。そして、「日本において日本国民が軍閥を倒し、彼らの伝統政策を一変すべきは、単なる支那問題の為のみならず、世界政策の上より見て目下の最大急務なると共に、支那国民が自国の軍閥官僚を倒して、根底あり主義ある共和国を建設するのは、何よりの急務に候はずや」²²と「日中の改造運動」を提案する。

また、1920 年 2 月にアメリカ留学の北京大学学生が滔天の家を訪ねた時、彼は日中両国の改造運動の関連について次のように語った。「私を樂觀せしめるものは、民国において既に改造運動の萌しがあり、我国において既に改造運動の芽が生えた事である。この両国の改造運動が成功した時こそ、真に理想的な日支親善が実行される時である。もし、一方だけできても、それは今よりはまだましであるけれども、是は両方とも成功せねばならぬし、また成功すべき時機に迫っていると私は思うのです。有体に言えば、私は民国の青年諸君の排外排日の意気に共鳴すると同時に、此意気を以って民国の改造に成功せら

²¹ 京都大学人文科学研究所『日本新聞五四報道資料集成』、1983 年、53 頁。「伝統的政策は捨てよ」張継氏ら「日本国民に告ぐ」（『大阪朝日新聞』1919 年 5 月 10 日記事）。

²² 宮崎滔天「東京より」（大正 7 年 11 月 10 日）、『宮崎滔天全集』第 4 巻平凡社、1973 年、38 頁。

れんことを望むや切也」²³。要するに、滔天は日本の改造の時機が熟しつつある今、日本の対華政策への攻撃に奔走するよりも、自国の改造に努力する方が有意義ではないかと中国青年に説かした。また、中国人の対日批判を待たずして、日本は「世界大勢」の中で改造への道を歩むべきではないかと滔天は思ったのである。

1919 年の前は、滔天は中国革命を成功させることを以って日本を含むアジア諸国を改造しようと考えていた。しかし、1919 年以後において、この考えは日中両国国民の自国の改造運動に変わっていったのである。この変化は恐らく、滔天の「外国人として枢機に参与して理想実行のため衛に当れる訳ではないし、結局指を引込む外はない」ことの自覚と、「支那革命から世界革命への道」は誇大妄想的経路にすぎなかったという反省からきたものであろう²⁴。そして、中国認識からみる限り、滔天の主張は中国の思想家の主張と多くの共通性を持っていることが分かる。「平等な国際関係にもとづく連携」という中国思想家の提言は決して滔天の思想と矛盾するものではなかった。

おわりに

本論は従来のアジア主義研究の中で強調されることのなかった「1919 年前後」という時期に注目し、日中両国の視点から当時におけるアジア主義思想の変化について考察を行った。分析の結果、日中のアジア主義認識は「1919 年前後」という時期においてすでに「分極化」していたこと、そして、考察を行った 5 人の思想家のアジア主義認識が、1919 年前後に多かれ少なかれ変化が発生したことがわかるようになった。

1919 年以後の孫文と李大釗のアジア主義は、抑圧の打破、民族解放を前提としてアジア諸民族も団結を目指す方向であり、基本的に一致するものであった。二人とも、帝国主義列強の抑圧からのアジア諸民族の解放と民族的平等の回復を最重視し、孫文は「大アジア主義」講演において、李大釗が論文「大

²³ 宮崎滔天「旅中漫録」（大正 8 年 2 月 8 日）、『宮崎滔天全集』第 2 巻平凡社、1972 年、440 頁。

²⁴ 初瀬龍平「アジア主義と国際システム」『日本の近代化を問う』勁草書房、1982 年、66 頁。

アジア主義と新アジア主義」の中で、日本国民に「日中両国民の平等な連帯に基づくアジア連邦と新しいアジア主義の実現」を提案した。そして、このような提案は内田良平、北一輝には受け入れられないものであったが、自由民権論に基づいた宮崎滔天のアジア主義の場合には、1919 年前後の時点において、中国の思想家の提言にもっとも接近していたことが本論の分析で明らかになった。

北一輝、宮崎滔天がアジア主義の実践の「現場」から退いたこと、内田良平がブルジョアジーと「立場」を一緒にしたことは、時勢の変動への対応という面において（本論においては 1919 年前後）、アジア主義思想の無力さを露呈していた。1919 年前後を画期として多様な展開をみせたアジア主義であったが、山東出兵から満州事変へと急速に軍国主義化と帝国主義的侵略に雪崩を打っていく中で、残念ながら日本の「アジア主義」は孫文や李大釗が描いたコースとは対極をなす「大東亜共栄圏」や「東亜共同体」の実態を覆い隠すスローガンに過ぎないものに転落していったのである。

<ABSTRACT>

The Research on Pan-Asianism of China and Japan — Focusing on the Period Around 1919

HU YIN

This paper will focus on the period around 1919 that the past “Pan-Asianism studies” have not paid enough attention, and discuss what kinds of changes have happened in China and Japan’s Pan-Asianism during this period. As the research object, this paper will choose the 5 typical characters who were widely known as the Pan-Asianist on the history of Sino-Japanese relations, Such as Sun Wen, Li Dazhao, Uchida Ryohei, Kita Ikki, and Miyazaki Toten. Through the analysis, we can understand these 5 thinkers’ Pan-Asianism more or less has changed in around 1919. And the China and Japan’s perception of the Pan-Asianism present profound contradictions which hardly to integrate and harmonize.

Keywords: Pan-Asianism, Sino-Japanese relations, the period around 1919